熊野那智大社

熊野那智大社の歴史は約 1700 年前まで遡ることができます。この神社は那智大滝で始まった信仰の新たな礼拝所として建立され、当時から変わらない自然を尊ぶ伝統を守り続けています。この場所が選ばれたのは、神武天皇を奈良に導いた「八咫烏」と呼ばれる三本足の大きなカラスがここに降り立ったためと伝えられています。

かつて日本で一般的だった神仏習合の例に漏れず、那智大社とその隣の青岸渡寺は、その歴史のほとんどの期間において一山の複合的な宗教施設でした。1868 年の明治維新後、新政府が神道と仏教の分離を命じたため、現在、寺院と神社は正式に区別されています。

境内

那智大社の社殿は中庭を囲むように配置されています。大鳥居の向かいは宝物殿と御縣彦社と呼ばれる摂社です。右手には拝殿があります。

拝殿の裏手にある玉垣は、一般公開されていません。玉垣内の 6 棟の本殿には 13 柱の神々が祀られています。主祭神は熊野夫須美大神（くまのふすみのおおかみ）です。熊野那智大社は祭神が神輿で那智大滝に運ばれ「里帰り」をする那智の火祭でよく知られています。

胎内くぐり

拝殿の前には御神木である樹齢 850 年以上の大クスがあります。
この木の下部には「胎内くぐり」と呼ばれる空洞があり、それをくぐると幸運が得られるとされています。